マウス歯根膜における leptin receptor 陽性細胞の幹細胞性と LRP1 陽性細胞の役割について

中 村 純 基

日本大学大学院歯学研究科歯学専攻 口腔構造機能学分野 日本大学歯学部歯科矯正学講座 (指導:本吉 満教授,二宮 禎准教授)

要旨:

目的:歯根膜幹細胞(PDLSCs)は、歯根膜および骨の再生に重要な細胞である。Leptin receptor(Lepr)は間葉系 幹細胞(MSCs)のマーカーの一つで、PDLSCsにもその発現がみられる。本研究では、歯根膜細胞(PDLs)から Lepr 陽性細胞を分離し、その幹細胞性と多分化能を検証し、また low-density lipoprotein receptor-related protein1(LRP1)陽性細胞の役割について検討した。

方法:マウス臼歯から PDLs を採取し,Lepr 陽性細胞を分離した。幹細胞マーカーの発現と多分化能は realtime RT-PCR と oil red O 染色によって調べた。また,抜歯窩における PDLSCs と LRP1 の関係は免疫組織化学 的に,LRP1 の役割は siRNA を PDLs へ導入することで検討した。

結果: Lepr 陽性細胞は MSCs マーカーを発現し, 骨芽細胞と脂肪細胞へ分化した。また, LRP1 陽性の PDLs は 抜歯後早期に出現し, その後, 骨形成を誘導した。PDLs の LRP1 mRNA を発現抑制すると, *bmp-2*, *bmp-4*, *opg* の発現減少と *rankl* の発現増加が認められた。

結論:Lepr 陽性細胞は PDLSCs の特徴をもち、LRP1 は骨形成の調節に関わることが示唆された。

キーワード:歯根膜細胞, 幹細胞, 骨芽細胞分化, leptin receptor, low-density lipoprotein receptor-related protein 1

Multipotency of leptin receptor-positive cells and function of LRP1 positive-cells in the mouse periodontal ligament

Yoshiki Nakamura

Nihon University Graduate School of Dentistry, Major in Oral structural and Functional Biology Department of Orthodontics, Nihon University School of Dentistry (Directors: Prof. Mitsuru Motoyoshi and Assoc. Prof. Tadashi Ninomiya)

Abstract: Purpose: Periodontal ligament stem cells (PDLSCs), which differentiate into osteoblasts, cementoblasts and fibroblasts, are included in periodontal ligament cells (PDLs) and play a role in periodontal tissue regeneration. Leptin receptor (Lepr), a marker of mesenchymal stem cells, is expressed in PDLSCs. However, the function of Lepr-positive PDLs is not well understood. To investigate the characteristics of Lepr-positive PDLs, experiments using mouse-derived PDLs were designed *in vivo* and *in vitro*.

Methods: Lepr-positive PDLs were isolated from PDLs in mouse molars and analyzed by real-time RT-PCR and immunohistochemical staining. To define the effect of low-density lipoprotein receptor-related protein 1 (LRP1) on PDLs in tooth socket, functional examination was performed using siRNA technique.

Results: Lepr-positive PDLs expressed the stem cell markers and differentiated into osteoblasts and adipocytes. Immunohistochemical staining on tooth socket revealed that LRP1-positive PDLs were first detected in the socket at 3 days after tooth extraction, increased in the granulation tissues at 5 days, and differentiated into osteoblasts and osteocytes with bone formation at 7 days. Furthermore, the expression of *bmp-2*, bmp-4, and *opg* decreased, whereas *rankl* expression increased in LRP1 siRNA-introduced PDLs.

Conclusion: Lepr-positive PDLs has multipotency similar to PDLSCs, and LRP1 is involved in bone regeneration in tooth socket by regulating the interaction between osteoblasts and osteoclasts.

日本大学歯学部歯科矯正学講座

〒101-8310東京都千代田区神田駿河台1-8-13

TEL:03-3219-8105 FAX:03-3219-8312 E-mail:deyo18032@g.nihon-u.ac.jp

⁽受付:令和4年1月15日)

責任著者連絡先:中村純基

Keywords: periodontal ligament cells, stem cells, osteoblast differentiation, leptin receptor, low-density lipoprotein receptor-related protein 1

緒 言

抜歯窩の修復は、骨折の修復と同様に、炎症期、増殖 期および骨形成期の過程を辿る¹²⁾。炎症期は、炎症性細 胞が抜歯窩に浸潤し、血管内皮細胞や未熟な線維芽細胞 とともに肉芽組織を形成する。その後、増殖期に移行し、 幹細胞から分化した骨芽細胞によって幼弱な骨がつくら れる。そして、骨形成期では骨芽細胞と破骨細胞の相互 作用による骨のリモデリングが繰り返され、抜歯窩は成 熟した骨によって埋められるようになる。

抜歯窩修復の分子メカニズムを解明するには、歯根膜 細胞(PDLs)に含まれる歯根膜幹細胞(PDLSCs)の特性を 調べる必要がある。これまでに、Hosoyaら³⁾は、green fluorescent protein(GFP)で標識したラット臼歯を野生 型ラット背部へ皮下移植した結果、GFP標識 PDLs が骨 芽細胞に分化し、骨組織を形成することを示した。また、 Seoら⁴⁾は、PDLsに存在する CD146と Stro-1 陽性の細 胞がセメント芽細胞、骨芽細胞および線維芽細胞に分化 することを明らかにしている。Yuanら⁵⁾も、Wntに反 応する PDLs が抜歯窩修復の骨再生に関与することを報 告している。これらの研究成果は、PDLsに含まれる PDLSCs が歯槽骨の形成に重要な役割を演じていること を示すものである。

PDLSCsの特性を詳細に解明するには、PDLSCsの分離ならびに解析が必須である。PDLSCsは、CD29、 CD44、CD73、CD90、CD105、CD146、CD166および Stro-1などの間葉系幹細胞(MSCs)と同じ細胞膜抗原を もつことが知られている⁴⁶⁾。近年、leptinシグナルが MSCsの細胞分化を制御することが報告され⁷⁾、また、 骨髄にみられる leptin receptor (Lepr)陽性細胞が骨芽細 胞、脂肪細胞および軟骨細胞への分化能をもつこと、 PDLs に存在する Lepr 陽性細胞が抜歯窩の骨再生に関 与することが明らかになった⁸⁹⁾。これらの研究は、Lepr が PDLSCs の分離において有望な細胞膜抗原であること を示唆している。そこで、本研究では、まず、この Lepr に注目して歯根膜組織から Lepr 陽性細胞を分離し、そ れらの幹細胞性と分化能を検証することとした。

一方, 抜歯窩治癒過程を理解するには, 骨形成関連因子に 関する知見も不可欠である。Bone morphogenetic protein-2 (BMP-2)は, 転写因子の runt-related transcription factor 2(Runx2)と osterix の発現を介して PDLSCs の骨芽細胞 分化を促進する¹⁰⁾。また, 前駆骨芽細胞や PDLSCs から 分泌された BMP-2 は, オートクリンに作用し, これら の細胞から骨芽細胞への分化を促す¹¹⁾。

BMP-2と同様に receptor activator of the NF- κB

ligand(RANKL)も骨代謝を維持するために欠かせない サイトカインである。RANKL は骨芽細胞や MSCs から 分泌され,前駆破骨細胞の RANK と結合することによっ て,前駆破骨細胞から破骨細胞への分化を誘導する^{12,13)}。 興味深いことに、低密度リポタンパク受容体ファミリー に属する膜タンパクの low-density lipoprotein receptorrelated protein 1(LRP1)を欠失した骨芽細胞では, RANKL 産生が増加し、破骨細胞分化が促進する¹⁴⁾。こ \mathcal{O} LRP1 *i*t, transforming growth factor- $\beta \approx$ plateletderived growth factor などの多くのリガンドと結合す ることで、受容体依存型エンドサイトーシスにおいて機 能し、細胞遊走、細胞内タンパク輸送、細胞分化などを 調節している¹⁵⁾。また,前駆破骨細胞にみられるLRP1 の発現抑制は、破骨細胞分化を阻害することから、LRP1 は骨代謝および骨再生を調節する重要な因子の一つであ ると考えられている¹⁶⁾。しかし、抜歯窩の骨再生に関与 する PDLSCs に発現している LRP1 の役割については不 明な点が多い。そこで、本研究では、抜歯窩でのLRP1 陽性細胞の動態を調べるとともに、LRP1の発現抑制が 骨形成関連因子へ及ぼす影響についても検討を加えた。

材料および方法

1. 実験動物

雄性 ddy マウス(6 週齡,日本エスエルシー,浜松)は, 12 時間の明暗サイクルを調整できる恒温室(23℃)で飼 育した。また,飼育期間は,ラット・マウス MF 固形飼 料(オリエンタル酵母工業,東京)と水を自由に摂取させ た。本研究は,日本大学歯学部動物実験委員会の承認(承 認番号:AP18DEN037-3)を得て,米国国立予防衛生研究 所および国際疼痛学会のガイドライン¹⁷⁾に従って,動物 の処置を行い,全ての実験において,実験動物の苦痛軽 減と使用動物数の低減に努めた。

2. PDLs の調製

5% isoflurane(大日本住友製薬,大阪)吸入および5 mg/kg butorphanol tartrate(Meiji Seika ファルマ,東 京)を使用し,深麻酔下で心臓からの全採血によって安 楽死させたマウス上下顎の臼歯を抜歯し,3.75 mg/ml kanamycin sulfate solution(Meiji Seika ファルマ,東京) に4℃,2時間浸漬した。その後,phosphate buffer saline(PBS)で洗浄し,2mg/ml collagenase(富士フィ ルム和光純薬,大阪)と0.25% trypsin(Invitrogen, Waltham, MA, USA)を含んだ血清非添加α-minimal essential medium(α -MEM)で,37℃,20分間インキュ ベートした後,PDLsを回収した。この操作は4回繰り 返され,毎回の酵素処理後に採取したPDLsは,培養 シャーレへ播種し、10% fetal bovine serum (FBS, PAN Biotech GmbH, Aidenbach, Germany) と1% antibiotic-antimycotic (Invitrogen)を含むα-MEMを用 いて、37℃、5%炭酸ガス存在下で培養した。なお、 PDLs は凍結保存することなく、その都度抜去臼歯から 採取・調製し実験に供した。

3. Lepr 強発現細胞(Lepr^{hi} PDLs)の分離

培養した PDLs を 0.05% trypsin 処理によってシャー レから回収した後、PBS に懸濁させ、ウサギ抗 Lepr ポ リクロナール抗体(100 倍希釈, プロテインテック・ジャ パン,東京)で、4℃,30分間、インキュベートした。 その後、PBS で洗浄し、ヤギ抗ウサギ IgG マイクロビー ズ (5 倍 希 釈, Miltenyi Biotec, Bergisch Gladbach, Germany)を加えて、4℃、30分間の反応を行い、細胞 を磁気ビーズで標識した。PBS で洗浄後、細胞浮遊液は 磁石に設置した分離カラム (MACS MS, Miltenyi Biotec) ヘアプライし、PDLs に含まれる Lepr 強発現 PDLs(Lepr^{hi} PDLs)をカラムに吸着させた。分離カラム をPBSで洗浄後、磁石から取り外し、吸着したLeprhi PDLs をシリンジで押し出し回収した。また、分離カラ ムに吸着しなかった flow through も同時に回収し Lepr^{ft} PDLsとして、比較対象にした。回収されたLepr^{hi} PDLs と Lepr^{ft} PDLs は培養シャーレで,7日間培養し てから実験に供した。

4. Lepr^{hi} PDLs と Lepr^{ft} PDLs の分化能

Lepr^{hi} PDLs と Lepr^{ft} PDLs をそれぞれ 48-well plate に播種し(5×10⁴ cells/well), 10%FBS を含む α-MEM で 16 時間培養した後, 100 ng/ml BMP-2(R&D systems, Minneapolis, MN, USA)を添加し, 骨芽細胞へ分化さ せた。培地交換は2~3日毎に実施し, 7日目に RNA を 抽出した。得られた RNA から cDNA を合成し, alkaline phosphatase(alp), osterix(osx), osteocalcin(ocn)の遺伝 子発現について検討した。

同様に、24-well plateに播種したLepr^{hi} PDLsと Lepr^{ft} PDLs(1×10⁵ cells/well)を48時間培養した後、 脂肪細胞分化因子(0.5 mM isobutyl-1-methyl xanthine, 100 nM dexamethasone, 0.1 mM indomethacin, 10 $\mu g/$ ml insulin)を添加することで脂肪細胞へ分化させた。培 地交換は2~3日毎に実施し、21日目に10%中性ホルマ リン溶液によって細胞を固定し、oil red O 溶液で染色し た。染色後の細胞は1 ml isopropanolを加えて、色素を 溶出させ、マイクロプレート吸光分光光度計(SpectraMax ABS Plus、モレキュラーデバイスジャパン、東京)を利 用して、波長492 nmの吸光度を計測した。さらに、培 養 21日目の細胞から RNA を抽出し、cDNA の合成後、 adiponectin と c/ebp の遺伝子発現について調べた。

5. RNA 抽出と real-time RT-PCR

RNA の抽出は、NucleoSpin RNA Plus(タカラバイオ、

草津)を使用した。 $10 \mu g \text{ o}$ RNAを鋳型にして, PrimeScript reverse transcriptase(タカラバイオ)と反応 させ, cDNAを合成した。Real-time RT-PCRは, TB Green Premix Ex Taq II(タカラバイオ)とCFX connect system(Bio-Rad Laboratories, Hercules, CA, USA)を 使用した。95℃, 30秒間の前処理後, 95℃, 5秒と 60℃, 30秒のサイクルを40回繰り返すことで, DNAを 増幅した。測定データは, CFX maestro software(Bio-Rad Laboratories)を利用して, $2^{-\Delta CT}$ 法によって解析した¹⁸⁾。 使用したプライマーの塩基配列を表1に示す。

表1 Real-time RT-PCR に使用したプライマーの塩基配列

Name		Primer sequence
actin	Forward	5'-TGAGAGGGAAATCGTGCGTGAC-3'
	Reverse	5'-AAGAAGGAAGGCTGGAAAAGAG-3'
lepr	Forward	5'-TCAGAATTTTGGGTGGAAAA-3'
	Reverse	5'-GTCCAGGTGAGGAGCAAGAG-3'
cd29	Forward	5'-TGGCAACAATGAAGCTATCG-3'
	Reverse	5'-ATGTCGGGACCAGTAGGACA-3'
cd44	Forward	5'-CTCCTTCTTTATCCGGAGCAC-3'
	Reverse	5'-TGGCTTTTTGAGTGCACAGT-3'
cd73	Forward	5'-ATGAACATCCTGGGCTACGA-3'
	Reverse	5'-GTCCTTCCACACCGTTATCAA-3'
cd90	Forward	5'-AACTCTTGGCACCATGAACC-3'
	Reverse	5'-TCGGGACACCTGCAAGAC-3'
cd105	Forward	5'-CATTGCACTTGGCCTACGA-3'
	Reverse	5'-GATGTTGACTCTTGGCTGTCC-3'
cd106	Forward	5'-TCTTACCTGTGCGCTGTGAC-3'
	Reverse	5'-ACTGGATCTTCAGGGAATGAGT-3'
cd146	Forward	5'-AAACTGGTGTGCGTCTTCTTG-3'
	Reverse	5'-CTTTTCCTCTCCTGGCACAC-3'
cd166	Forward	5'-CTTCAGTGTTTGGGGGAATGG-3'
	Reverse	5'-TTATGCCTTCAGGCTGTCCT-3'
alp	Forward	5'-CGGATCCTGACCAAAAACC-3'
	Reverse	5'-TCATGATGTCCGTGGTCAAT-3'
osx	Forward	5'-AGAGATCTGAGCTGGGTAGAGG-3'
	Reverse	5'-AAGAGAGCCTGGCAAGAGG-3'
ocn	Forward	5'-AGACTCCGGCGCTACCTT-3'
	Reverse	5'-CTCGTCACAAGCAGGGTTAAG-3'
adiponectin	Forward	5'-GGAGAGAAAGGAGATGCAGGT-3'
	Reverse	5'-CTTTCCTGCCAGGGGTTC-3'
c/ebp	Forward	5'-AAACAACGCAACGTGGAGA-3'
	Reverse	5'-GCGGTCATTGTCACTGGTC-3'
bmp2	Forward	5'-CGGACTGCGGTCTCCTAA-3'
	Reverse	5'-GGGGAAGCAGCAACACTAGA-3'
bmp4	Forward	5'-GAGGAGTTTCCATCACGAAGA-3'
	Reverse	5'-GCTCTGCCGAGGAGATCA-3'
opg	Forward	5'-GTTTCCCGAGGACCACAAT-3'
	Reverse	5'-CCATTCAATGATGTCCAGGAG-3'
rankl	Forward	5'-AGCCATTTGCACACCTCAC-3'
	Reverse	5'-CGTGGTACCAAGAGGACAGAGT-3'

6. マウス臼歯の抜歯と組織切片作成

2% isoflurane 吸入 および5 mg/kg butorphanol tartrate(Meiji Seika ファルマ,東京)により,マウスを 麻酔し,上顎第一臼歯を鉗子によって抜歯した。抜歯後, 1,3,5,7 および10日目に上顎骨を摘出し,4% paraformaldehydeで4℃,16時間固定した。採取した 上顎骨は10% EDTA 溶液に4週間浸漬して脱灰後,パ ラフィン包埋し,厚さ約4 μ mの切片を作成した。

7. Micro-CT 撮影

抜歯後 5,7 および 10 日目に,2% isoflurane 吸入およ び 5 mg/kg butorphanol tartrate (Meiji Seika ファルマ, 東京)により,マウスを麻酔し,上顎第一臼歯の抜歯窩 を micro-CT (R_mCT,リガク,東京)で撮影した。撮影 条件は,管電圧 100 kV,管電流 160 μ A,撮影時間 2 分 および撮影倍率 10 倍とした。撮影データの解析は,画 像処理ソフトの i-VIEW (モリタ,東京)を使用した。

8. 免疫組織化学

PDLs を 35 mm glass base dish(イワキ,東京)に播種し (1×10³ cells/dish), 16 時間の培養後,4% paraformaldehyde で固定し,0.2% triton-X 100 で透過処理を施した。PBS で洗浄後,ヤギ抗マウス Lepr ポリクロナール抗体(100 倍希釈,R&D system)で,4℃,16 時間の反応を行い, PBS で洗浄後,二次抗体の alexa fluor 555 標識ロバ抗 ヤギ IgG(Invitrogen)と室温で,1時間反応させた。PBS で洗浄後,Hoechst 33342 溶液(Sigma Aldrich, St. Louis, MO, USA)で核染色を行った後,蛍光顕微鏡(オ リンパス,東京)で観察した。

パラフィン切片は、キシレンで脱パラフィン後、下降 エタノールに浸漬させて親水性にした。0.3% 過酸化水素 水で、内因性ペルオキシターゼを失活させ、PBS で洗浄 後、3% bovine serum albumin(富士フィルム和光純薬) によって室温で1時間のブロッキングを行った。ウサギ 抗LRP1ポリクロナール抗体(100倍希釈、Abcam、 Cambridge、UK)で、4℃、16時間の反応後、PBS で洗 浄し、ヒストファインシンプルステインマウス MAX-PO (ニチレイバイオサイエンス、東京)を滴下して、さらに 室温で1時間、静置した。PBS で洗浄後、ヒストファイ ンDAB 基質キット(ニチレイバイオサイエンス)を用い て、LRP1の局在を可視化し、hematoxylin solution(武

表2 LRP1の発現抑制に使用した siRNA の塩基配列

Name	Target sequence
Negative control	5'-AATTCTCCGAACGTGTCACGT-3'
siLRP1 1	5'-CACGTTGGTTATGCACATGAA-3'
siLRP1 2	5'-CTGCCGGGTGTACAAATGTAA-3'
siLRP1 3	5'-TGGCAGATGTATTAACATCAA-3'
siLRP1 4	5'-CGGAGTCACTTACATCAATAA-3'

藤化学,東京)で対比染色を施した。スライドは水洗後, 上昇エタノールに浸漬させることで脱水し,キシレンで 透徹後,標本用封入剤(MGK-S,松浪硝子工業,大阪)で 封入した。

9. siRNA を使用した LRP1 発現の抑制

PDLs を 6-well plate に播種(7×10⁴ cells/well)した 後, Lipofectamine RNAiMAX transfection reagent (ThermoFisher Scientific, Waltham, MA, USA)と 10 nM の LRP1 siRNA(終濃度:8 pmol/well, Qiagen, Hilden, Germany)を添加し,3日間培養した。使用した LRP1 siRNA 1~4と negative control siRNA (Qiagen)の塩基配列を表2に示す。LRP1 siRNA 1~4 を導入した PDLs をそれぞれ siPDL1~4とし, negative control siRNA を cPDL, また siRNA 非処理の PDLs を iPDL とした。

10. Western blot

siPDL1~4, iPDL, cPDL は細胞溶解液(0.1% NP-40 lysis buffer, 20 mM Tris (pH7.5), 50 mM β -glycerophosphate, 150 mM NaCl, 1 mM EDTA, 25 mM NaF, 1 mM Na₃VO₄, セリン/システイン/ア スパラギン酸/サーモリシン様プロテアーゼ阻害剤 (Sigma Aldrich))でそれぞれ処理し、14,000×g, 15分 間の遠心分離によって、上清を回収した。得られた上清 のタンパク量は, protein assay rapid kit Wako II (富士 フィルム和光純薬)によって定量した。30 µg のタンパク を含むそれぞれの上清はSDS sample buffer と混和後, 95℃で5分間加熱し, 12% polyacrylamide gel(Bio-Rad Laboratories) ヘアプライし、電気泳動で分画した。泳動 終了後, nitrocellulose membrane(GE Healthcare Life Sciences, Little Chalfont, UK) に転写し, PVDF blocking reagent(東洋紡, 大阪)に浸漬させることで非 特異的反応のブロッキングを行った。PBS で洗浄後, membrane はウサギ抗 LRP1 ポリクロナール抗体(2,000 倍希釈, Abcam) または、マウス抗β-actin 抗体(10,000 倍希釈, Sigma Aldrich)と混和した Can Get Signal 溶 液(東洋紡)で、4℃、16時間反応させた。洗浄後、 membrane は, HRP 標識 2 次抗体(Bio-Rad Laboratories) と混和した Can Get Signal 溶液中に室温で1時間反応 させてから, ECL 溶液(GE Healthcare Life Sciences) に浸し、その発光を ChemiDoc XRS System (Bio-Rad Laboratories)で撮影した。取り込んだ画像はImageJ (National Institute of Health, Bethesda, MD, USA) を利用し, LRP1 および β -actin のバンドのデンシトメト リー処理から得たグラフの面積を計算することで、タン パクの発現強度を解析した。

11. 統計学的解析

得られたデータの統計分析には, GraphPad Prism 8 (GraphPad Software, San Diego, CA, USA)を用いた。 2つのグループ間の比較は unpaired Student *t*-test, また複数のグループ間の比較は,一元配置分散分析を行った後に, *post hoc* テストとして Tukey 検定を行った。実験は,3回繰り返し,得られた結果を平均値と標準偏差で示すとともに,有意水準を 0.05 とした。

結 果

1. Lepr 強発現細胞の幹細胞性について

培養した PDLs に対する Lepr 抗体の特異性を免疫組 織化学的に調べた結果, PDLs の一部に Lepr 陽性細胞の 存在が確認できた(図1)。MACSによって分離した Lepr^{hi} PDLs にみられる Lepr の発現レベルを, real time RT-PCR で検討した。その結果, Lepr^{hi} PDLs は分 離カラムに吸着しなかった Lepr^{ft} PDLs よりも約 1.8 倍 高いLepr遺伝子発現を示した(図2A)。また、Lepr^{hi} PDLsでは, MSCsの細胞膜抗原である cd44, cd73, *cd90, cd105, cd146*の発現がLepr^{ft} PDLs と比べて強 かった(図2B)。次に、BMP-2をLepr^{hi} PDLsの培養系 に加えて骨芽細胞へ分化誘導した結果, Lepr^{hi} PDLs は, 骨芽細胞マーカーである alp, osx, ocn の発現が Lepr^{ft} PDLsよりも強かった(図2C)。同様に、脂肪細胞分化 誘導因子を Lepr^{hi} PDLs の培養系に加えて, 脂肪細胞へ の分化能について調べた。その結果, Leprhi PDLsと Lepr^{ft} PDLs のどちらにも oil red O 陽性細胞が観察で きたが、Lepr^{hi} PDLs では成熟脂肪細胞の特徴である脂 肪滴(図 2 D)と脂肪細胞マーカーの adiponectin と c/ebp の発現が強かった(図2E)。

2. 抜歯窩の骨再生と LRP1 陽性細胞の動態

抜歯窩の骨再生を観察するために,マウス上顎第一臼



図1 PDLsの免疫組織化学によるLepr陽性細胞の同定
矢印はLepr陽性細胞を示す(スケールバー:30 μm)。

歯の抜歯窩を micro-CT を利用して経日的に撮影した。 抜歯後5日目の抜歯窩に不透過像は認められなかった が、7日目になると抜歯窩の辺縁に骨組織と思われる不 透過像が出現し、10日目には抜歯窩全体を占めた (図3A)。抜歯窩の骨再生過程にみられるLRP1陽性細 胞の存在を調べるために、LRP1を免疫組織化学的に染 色した。抜歯後1日目は、抜歯窩内の細胞は乏しかった が、3日目になると抜歯窩全体は肉芽組織によって覆わ れ,わずかに LRP1 陽性細胞が確認できた(図3B)。5日 目になると、抜歯窩には未熟な骨組織の形成が始まり、 LRP1 陽性細胞が窩内の広範囲に認められた(図3B)。7 日目の抜歯窩は骨組織によってほとんど置換され、LRP1 の発現も再生骨周辺の骨芽細胞や骨小腔内の骨細胞に確 認できた(図3B)。しかし、10日目になると、LRP1の 発現は弱まり、一部の骨芽細胞や骨細胞のみに発現がみ られた(図3B)。

3. LRP1の PDLs における役割

Lepr 陽性細胞に発現している LRP1 の機能を明らかに するため、PDLs に siRNA (siLRP1 1~4)を導入して LRP1 mRNA の発現を抑制した。その結果, siLRP1 1, 2, 4を導入した PDLs で、LRP1 の発現レベルがコントロー ル(cPDL)と比較して、顕著に低かった(図 4 A, B)。特 に LRP1 の発現抑制が確認できた siPDL1 と siPDL4 か ら RNA を抽出して、骨代謝関連因子の発現について調 べた。その結果、siPDL1 と siPDL4 は、コントロール (cPDL)と比較して、bmp-2, bmp-4, opg の発現が少なく、 rankl の発現が多かった(図 4 C)。

考 察

本研究によって、PDLsから分離したLepr^{hi} PDLsが 幹細胞としての細胞膜抗原マーカーを発現しているこ と、また誘導培地によってLepr^{hi} PDLsが骨芽細胞およ び脂肪細胞へ分化することが示された。すなわち、歯根 膜のLepr 陽性細胞は多分化能を有する幹細胞であるこ とを実験的に検証することができた。具体的には、 Lepr^{hi} PDLsにおいて、Lepr^{ft} PDLsよりも有意に高い *cd44、cd73、cd90、cd105*および*cd146*の発現が認め られた。これらの細胞膜抗原は、骨髄由来のMSCsだけ でなく、PDLSCsでも高い発現レベルを示すことが報告 されており^{6,19,20)}、なかでもCD73、CD90、CD105は、 MSCsとして同定するために必要な細胞膜抗原とされて いる²⁰⁾。

多分化能については、PDLSCs がセメント芽細胞, 脂 肪細胞, そして線維芽細胞へ分化することを Seo ら⁴⁾が 報告して以降, PDLSCs の同定において, 間葉系細胞へ の分化能を実際に示すことが求められるようになった。 このため, PDLs の side population や限界希釈によって 得られたクローンについても, MSCs の細胞膜抗原を発



図2 Lepr^{hi} PDLsの幹細胞性の検討

A:Lepr 強発現 PDLs(Lepr^{hi} PDLs)と flow through PDLs(Lepr^{ft} PDLs)における Lepr の遺伝子発現, B:Lepr^{hi} PDLs と Lepr^{ft} PDLs の細胞膜抗原(幹細胞抗原)の遺伝子発現, C:Lepr^{hi} PDLs と Lepr^{ft} PDLs の骨芽細胞マーカーの遺伝子発現, D:Oil red O 染色 による Lepr^{hi} PDLs と Lepr^{ft} PDLs の脂肪細胞分化能の評価(スケールバー:100 µm), E:Lepr^{hi} PDLs と Lepr^{ft} PDLs の脂肪細胞分化能の評価(スケールバー:100 µm), E:Lepr^{hi} PDLs と Lepr^{ft} PDLs の脂肪細胞マー カーの遺伝子発現, *p < 0.01, 統計学解析は A と B では unpaired Student *t*-test を, C と D では一元配置分散分析と Tukey 検定を使 用した(n=3)。

現し、かつ骨芽細胞と脂肪細胞へ分化するということか ら PDLSCs と認知されるに至っている^{11,21)}。本研究では、 BMP-2 で刺激した Lepr^{hi} PDLs では *alp*, *osx*, *ocn* の強 い発現が認められ、脂肪細胞への分化誘導によって脂肪 滴をみる成熟脂肪細胞への分化が生じることを示した。 これらの結果は、Lepr^{hi} PDLs が骨芽細胞と脂肪細胞の それぞれに分化できる能力をもち、Lepr^{hi} PDLs が PDLSCs であることを明確に支持する知見だと考えられ る。

本研究では、抗Lepr抗体による分取でflow through としたLepr^{ft} PDLs においても、Lepr^{hi} PDLs よりも有 意に低レベルだが、骨芽細胞と脂肪細胞の分化マーカー が検出された。培養 PDLs には、弱い Lepr 陽性を示す 細胞が散見されたことから、使用した抗Lepr 抗体に対 して affinity の低い Lepr 陽性細胞が flow through に含 まれている可能性があり、また、その Lepr 陽性細胞と 陰性細胞の存在比がマーカー発現量の検出に影響を及ぼ した可能性もある。本研究の結果が示すように, Lepr は, PDLSCs の分離に有用であるが, 他の細胞膜抗原との組合わせで用いることも検討することも必要と考えられる。

本研究は、LRP1 陽性細胞が抜歯後3日目に抜歯窩内 に現れ、その後、抜歯窩内の骨再生に関わることを明ら かにした。PDLSCsとして考えられているLepr 陽性細 胞や axin2 陽性細胞もまた、抜歯後3日で、窩内に動員 されて骨組織を再生する細胞として働く^{5,9)}。LRP1 陽性 細胞は、Lepr 陽性細胞および axin2 陽性細胞と類似した 出現パターンや分布⁵⁾を示したことから、PDLSCs であ り、かつ、LRP1 の発現が PDLSCs の細胞分化および抜 歯窩再生に関わっている可能性がある。しかし、本研究 では、LRP1 陽性細胞が PDLSCs である所見を得ておら ず、この仮説を立証するためには、さらなる検討が必要 である。

PDLSCs の細胞分化は、BMP シグナルによって調節



図3 抜歯窩の骨再生とLRP1発現の経日的観察

A:Micro-CT による抜歯窩の経日的観察,矢印は抜歯窩を示す。B:免疫組織化学による抜歯窩の LRP1 陽性細胞,下段は上段の囲線 の拡大像,矢印は LRP1 陽性細胞を示す。スケールバー:200 μm(上段),50 μm(下段) されており²²⁾, Katagiri ら²³⁾は, BMP-2とレチノイン 酸の共刺激が,マウス多分化性細胞株 C3H10T1/2の ALP 発現を誘導することを報告した。その後,脊椎動物 の四肢形成に関わる BMP-4 も,前駆骨芽細胞の骨芽細 胞への分化を誘導する因子として報告された^{24,25)}。本研 究において,LRP1 siRNAの PDLsへの導入は, bmp-2 と bmp-4 および RANKL のデコイレセプターである opg の発現レベルを抑制し,破骨細胞分化に必要な rankl の 発現を促進した。これらの結果は,PDLs に発現してい る LRP1 が,PDLSCs の G芽細胞分化を誘導するととも に,その一方で,PDLSCs の OPG の発現増加を介して 前駆破骨細胞の破骨細胞への分化を阻害することを意味 している。これまでの報告によれば、PDLSCs は BMP-2 を分泌することによって、自らの骨芽細胞分化を促 し^{11,26)},また MSCs の RANKL 発現は前駆破骨細胞の破 骨細胞分化を誘導する²⁶⁾と考えられている。

本研究で得られた結果から、PDLSCsは、エンドサイ トーシス型の受容体膜タンパクLRP1の関与のもとに、 BMP-2やRANKL、さらにはBMP-4やOPGを産生し て、オートクリンおよびパラクリン的な作用によって、 骨芽細胞および破骨細胞の分化を調節している可能性が あることが示唆された。





A:siRNA による LRP1 の発現抑制, Western blot によって LRP1 の発現レベルを調べた。siLRP1 1~4を導入した PDLs をそれぞれ, siPDL1, 2, 3, 4 とした。また, control として siRNA 非処理の PDLs を iPDL とし, negative control siRNA を導入した PDLs を cPDL と表した。B:LRP1 の発現, C:siLRP1 1 と 4 をそれぞれ導入した siPDL1 と 4 の *bmp-2*, *bmp-4*, *opg*, および *rankl* 発現, real-time RT-PCR によって, それぞれの遺伝子発現を調べた。[#]p<0.05, *p<0.01, 統計学解析は一元配置分散分析の後, Tukey 検定 を行った (n=3)。

結 論

本研究では、PDLs にみられる Lepr 陽性細胞の幹細胞 性と LRP1 陽性細胞の機能について検討し、その結果、 以下の結論を得た。

- 1. PDLs に Lepr 陽性細胞の存在を確認した。
- Lepr^{hi} PDLs に 幹 細 胞 マーカーの cd44, cd73, cd90, cd105 および cd146 の発現を認め, 骨芽細 胞および成熟脂肪細胞への分化能を示した。
- 3. LRP1 陽性細胞は、抜歯後3日の窩内にみられ、骨 芽細胞に分化して、抜歯窩の骨再生を誘導した。
- LRP1の発現抑制によって、PDLsの bmp-2, bmp-4 および opg の発現が抑制され, rankl の発現が亢進 した。

本研究遂行にあたり,格別たるご指導およびご校閲を賜りました日本大学歯学部歯科矯正学講座本吉 満教授,日本大学歯学 部解剖学第 I 講座 二宮 禎 准教授に謹んで深く感謝を申し上げます。また,本研究を通じ,多大なるご協力を賜りました日本大 学歯学部歯科矯正学講座および日本大学解剖学第 I 講座の皆様に 感謝申し上げます。

なお、本研究では開示すべき利益相反はない。

文 献

- Araújo MG, Silva CO, Misawa M, Sukekava F (2015) Alveolar socket healing: What can we learn?. Periodontol 2000 68, 122-134.
- Einhorn TA, Gerstenfeld LC (2015) Fracture healing: mechanisms and interventions. Nat Rev Rheumatol 11, 45-54.
- 3) Hosoya A, Ninomiya T, Hiraga T, Zhao C, Yoshiba K, Yoshiba N, Takahashi M, Okabe T, Wakitani S, Yamada H, Kasahara E, Ozawa H, Nakamura H (2008) Alveolar bone regeneration of subcutaneously transplanted rat molar. Bone 42, 350-357.
- 4) Seo BM, Miura M, Gronthos S, Mark Bartold P, Batouli S, Brahim J, Young M, Gehron Robey P, Wang CY, Shi S (2004) Investigation of multipotent postnatal stem cells from human periodontal ligament. Lancet 364, 149-155.
- Yuan X, Pei X, Zhao Y, Tulu US, Liu B, Helms JA (2018) A Wnt-responsive PDL population effectuates extraction socket healing. J Dent Res 97, 803-809.
- 6) Ivanovski S, Gronthos S, Shi S, Bartold PM (2006) Stem cells in the periodontal ligament. Oral Dis 12, 358-363.
- 7) Yue R, Zhou BO, Shimada IS, Zhao Z, Morrison SJ (2016) Leptin receptor promotes adipogenesis and reduces osteogenesis by regulating mesenchymal stromal cells in adult bone marrow. Cell Stem Cell 18, 782-796.
- Mizoguchi T, Pinho S, Ahmed J, Kunisaki Y, Hanoun M, Mendelson A, Ono N, Kronenberg HM, Frenette PS (2014) Osterix marks distinct waves of primitive and definitive stromal progenitors during bone marrow development. Dev Cell 29, 340-349.
- Zhang D, Zhang S, Wang J, Li Q, Xue H, Sheng R, Xiong Q, Qi X, Wen J, Fan Y, Zhou BO, Yuan Q (2020) LepR-

expressing stem cells are essential for alveolar bone regeneration. J Dent Res 99, 1279-1286.

- 10) Matsubara T, Kida K, Yamaguchi A, Hata K, Ichida F, Meguro H, Aburatani H, Nishimura R, Yoneda T (2008) BMP2 regulates osterix through Msx2 and Runx2 during osteoblast differentiation. J Biol Chem 283, 29119-29125.
- 11) Ninomiya T, Hiraga T, Hosoya A, Ohnuma K, Ito Y, Takahashi M, Ito S, Asashima M, Nakamura H (2014) Enhanced bone-forming activity of side population cells in the periodontal ligament. Cell Transplant 23, 691-701.
- 12) Suda T, Takahashi N, Udagawa N, Jimi E, Gillespie MT, Martin TJ (1999) Modulation of osteoclast differentiation and function by the new members of the tumor necrosis factor receptor and ligand families. Endocr Rev 20, 345-357.
- 13) Lacey DL, Timms E, Tan HL, Kelley MJ, Dunstan CR, Burgess T, Elliott R, Colombero A, Elliott G, Scully S, Hsu H, Sullivan J, Hawkins N, Davy E, Capparelli C, Eli A, Qian YX, Kaufman S, Sarosi I, Shalhoub V, Senaldi G, Guo J, Delaney J, Boyle WJ (1998) Osteoprotegerin ligand is a cytokine that regulates osteoclast differentiation and activation. Cell 93, 165-176.
- 14) Bartelt A, Behler-Janbeck F, Beil FT, Koehne T, Müller B, Schmidt T, Heine M, Ochs L, Yilmaz T, Dietrich M, Tuckermann JP, Amling M, Herz J, Schinke T, Heeren J, Niemeier A (2018) Lrp1 in osteoblasts controls osteoclast activity and protects against osteoporosis by limiting PDGF-RANKL signaling. Bone Res 6, 1-10.
- 15) Lillis AP, Van Duyn LB, Murphy-Ullrich JE, Strickland DK (2008) LDL receptor-related protein 1: unique tissuespecific functions revealed by selective gene knockout studies. Physiol Rev 88, 887-918.
- 16) Kohara Y, Haraguchi R, Kitazawa R, Kitazawa S (2020) Knockdown of lrp1 in RAW264 cells inhibits osteoclast differentiation and osteoclast-osteoblast interactions *in vitro*. Biochem Biophys Res Commun 523, 961-965.
- Zimmermann M (1983) Ethical guidelines for investigations of experimental pain in conscious animals. Pain 16, 109-110.
- 18) Livak KJ, Schmittgen TD (2001) Analysis of relative gene expression data using real-time quantitative PCR and the 2- $\Delta\Delta$ CT method. Methods 25, 402-408.
- Chen SC, Marino V, Gronthos S, Bartold PM (2006) Location of putative stem cells in human periodontal ligament. J Periodontal Res 41, 547-553.
- 20) Dominici M, Le Blanc K, Mueller I, Slaper-Cortenbach I, Marini F., Krause DS, Deans RJ, Keating A, Prockop DJ, Horwitz EM (2006) Minimal criteria for defining multipotent mesenchymal stromal cells. The international society for cellular therapy position statement. Cytotherapy 8, 315-317.
- 21) Hasegawa D, Hasegawa K, Kaneko H, Yoshida S, Mitarai H, Arima M, Tomokiyo A, Hamano S, Sugii H, Wada N, Kiyoshima T, Maeda H (2020) MEST regulates the stemness of human periodontal ligament stem cells. Stem Cells Int 2020, 9672673.
- 22) Hakki SS, Bozkurt B, Hakki EE, Kayis SA, Turac G,

Yilmaz I, Karaoz E (2014) Bone morphogenetic protein-2, -6, and -7 differently regulate osteogenic differentiation of human periodontal ligament stem cells. J Biomed Mater Res B Appl Biomater 102, 119-130.

- 23) Katagiri T, Yamaguchi A, Ikeda T, Yoshiki S, Wozney JM, Rosen V, Wang E, Tanaka H, Omura S, Suda T (1990) The non-osteogenic mouse pluripotent cell line, C3 H10 T1/2, is induced to differentiate into osteoblastic cells by recombinant human bone morphogenetic protein-2. Biochem Biophys Res Commun 172, 295-299.
- 24) Francis P, Richardson M, Brickell P, Tickle C (1994) Bone morphogenetic proteins and a signalling pathway that controls patterning in the developing chick limb.

Development 120, 209-218.

- 25) Chen D, Harris MA, Rossini G, Dunstan CR, Dallas SL, Feng JQ, Mundy GR, Harris SE (1997) Bone morphogenetic protein 2 (BMP-2) enhances BMP-3, BMP-4, and bone cell differentiation marker gene expression during the induction of mineralized bone matrix formation in cultures of fetal rat calvarial osteoblasts. Calcif Tissue Int 60, 283-290.
- 26) Han Y, You X, Xing W, Zhang Z, Zou W (2018) Paracrine and endocrine actions of bone - the functions of secretory proteins from osteoblasts, osteocytes, and osteoclasts. Bone Res 6, 1-11.